【不思議時空】
ヒュンマ、ほのぼ
の小話3編

# 【不思議時空】ヒュンマ、ほのぼの小話3編

**藤沢みや（miya）**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15406407**

ヒュンマ

短いお話3編　最終決戦前のみんなが揃っている不思議時空です。
深く考えてはいけない！！
①本を一緒に
②つくしを食べよう
③繕い物

# Table of Contents

# 【不思議時空】ヒュンマ、ほのぼの小話3編

【本を一緒に】

◇

　本を読むのはあまり好きじゃなかった。
　ネイル村には本自体があまりなくて、村長の家にある本を借りて読む程度。
　勉強はしていたけれど、大人の男の人が少ない分、子供でも働かなければ生活が成り立たない。
　だから、本を落ち着いて読むなんて村ではほとんどしなかった。
　……読書があまり好きじゃない私の、言い訳だけれど。

　ネイル村から外に出て、世界を知って……世の中には楽しい本がいっぱいあることも知る。
　まずは子供向けの、絵が多い本から。
　大魔王を倒してダイを見つけるまではそんな余裕はなかったけれど、ポップやメルルからも旅の途中にいろいろな物語を教えてもらった。
　お姫様や王子様が出てくるような物語はあまり現実的ではなくて趣味ではなかったけれど、学術書と呼ばれる本があることも知った。
　料理本や星座の本、動物の本、魔物の本。
　子供向けから大人向けまで、素敵な本が世界に溢れていることを知った。
　いろいろと『知る』ということはとても楽しい。
「マァム、読むか？」
　読書の楽しさにちょっとだけ目覚めた頃、ヒュンケルが一冊の本を差し出してくれた。

『食べられる野草と魔物』
　目を見開く。
　面白そう！
「読む！」
「アバンから借りたんだが……マァムも好きだろうと言われてな」
「ヒュンケルも興味があるの？」
「ああ……キノコは侮れんな」
　……きっと変なキノコを食べてお腹を壊したのだろう。
　くすりと笑う。
　すると遠い目をしていたヒュンケルも口元を緩める。
「一緒に読みましょう？」
　ついつい欲張ってねだってしまえば、それはあっさりと叶ってしまった。

　隣合って一緒に読むつもりで提案をしたのに、彼の膝の上で読むことになったのは……だいぶ恥ずかしかったけれど。

おしまい

゜*。，。*゜*。，。*゜*。，。*゜*。，。*゜*。，。*゜*。，。*゜*。，。*゜*。，。*゜
*。，。*゜

【つくしを食べよう】

◇

「マァム！　つくし！！」
　レオナが山菜を採っているマァムの傍まで、つくしを手にして駆けてくる。
「ダイ君に聞いたんだけど、これって本当に食べられるの？」
　瞳を煌めかせて尋ねてくるレオナは可愛いが、マァムは微苦笑を浮かべて答える。
「食べられるけれど、決しておいしいものではないわよ？　手間暇もかかるし」
　確かにつくしは食べられる。
　だが、『春の味わい』という調味料がなければ……筋だ。
「摘んだら、料理してくれる？」
　まるで小さな子供のようにわくわくしながら尋ねてくる少女を無碍にできない。微笑ましい気持ちで見つめながら「わかったわ」と了承の返事をする。
　レオナは「やった！」と弾むと、ダイの腕を引っ張って緩やかな傾斜の草の密集地に突き進んで行った。
　森の奥からはガサガサと大きな音がする。
　確かあけびがあると、クロコダインとヒュンケルが奥へ入っていったはず。
　今日は山の幸で食卓がにぎやかになりそうだ。

「えーー」
　つくしの傘を取る説明をしたら、レオナは頬を膨らませた。
「爪の汚れが気になるなら、自分が剥く分は先に洗っても大丈夫よ」
　つくしは先に洗う派と、後で洗う派がいる。
　綺麗に汚れは落ちないため、結局爪は汚れる。だから、マァムは先に洗わない……後で洗う派だ。
「あ、あと薄い手袋をして取るっていう手もあるわよ」
　マァムが提案するが、ダイもレオナもポップも途中で飽きてしまい、うつらうつらとしている。

「仕方がないわね……」
　マァムは苦笑をして三人の転寝を黙認する。
　たまには、ゆっくりと居眠りをしてもいい。
「……って、ヒュンケル、早いわね！」
　つい吃驚して声を上げてしまう。
　ヒュンケルの目の前には傘の取られたつくしが、こんもりと小山になっていた。
「それほど難しい作業ではない」
　ちなみにクロコダインは最初から参戦していない。残念ながらサイズ的に向いていないからだ。
　ヒュンケルは栗の皮むきや、つくしの傘取り、いんげんの筋取りなど、地道な作業が得意だ。黙々と進めている。
「これはどうするんだ？」
「お出汁で煮て、卵でとじるわ」
「卵でとじる？」
　ヒュンケルが小首を傾げる。
「最後に卵液を回し掛けること……かしら」
　マァムも小首を傾げて答える。
　日常で何気なく使っている言葉は、説明をしようとすると意外と難しい。
「調理を見てもらった方が早いかも。悲しいぐらいに嵩（かさ）が減るわよ」
　くすりと笑って言えば、ヒュンケルはぱちりと瞬いた。

　全部の傘を取り、洗ってから調理に入る。
　マァムが言った通り、つくしの全量は悲しいくらいに減った。そして、卵でとじるを実地で見てもらう。
「ああ……かつ丼というのと同じなんだな」
　パプニカのギュードンヤで、最近はかつ丼も販売を始めていた。
「あれは旨い」
　しみじみとヒュンケルが呟く。

「ええ、おいしいわよね」
　マァムも、しみじみと答える。
　ヒュンケルもマァムも、オシャレで量の少ない料理よりも、がっつりとした出来たら肉の料理が好きだったりする。
　オシャレな料理が好きなのは、レオナとポップだ。彼女らは、ヒュンケルから見たら小鳥のようにしか食べないから心配で仕方なくなる。
　かつ丼を食べに行こうとマァムを誘った時、ポップもいたので一緒に誘ったのだが、彼は顔をしかめて用があると断ってきた。残念だった。

　出来上がった、つくしの卵とじを中心とした山菜料理は……残念ながらレオナとポップの口には合わなかったようで、残りはスタッフ（他のアバンの使徒、パプニカ三賢者＆パプニカの兵士の皆さん）でおいしくいただきました、とさ。

おしまい
※レオナちゃんやポップはつくしとか食べたがりそうだけど、実際食べたら一口で遠慮しちゃいそう。この二人はめっちゃ美食なイメージ。

ﾟ*。，｡*ﾟ*。，｡*ﾟ*。，｡*ﾟ*。，｡*ﾟ*。，｡*ﾟ*。，｡*ﾟ*。，｡*ﾟ*。，｡*ﾟ*。，｡*ﾟ

【繕い物】

「痛っ！」
「どうした！？　マァム？」

マァムの小さな悲鳴に、離れたところに居たはずのヒュンケルが真っ先に駆け付ける。
　マァムの左手の指先には、小さな血の粒が出来上がっていた。
　ヒュンケルが手に取るよりも早く、マァムはホイミを唱えてしまう。
「……繕い物、苦手なの」
　一応、できるわよ？　でも苦手なの。マァムは顔を真っ赤にさせてそんな言い訳を口にする。
「貸してみろ」
　ヒュンケルは、マァムの手からボタン付けが途中のシャツを受け取るとすっと終わらせてしまう。
「凄い！」
「刺すのは得意だからな」

　ポップはたまたま通りがかっただけだったが、笑えない長兄ジョークに……遠い目をするしかなかった。
　マァムは素直に褒めるだけ。
　ポップは目を眇めて周囲を見やる。

「……ボケが多過ぎる」
　悲しいことに、ツッコミ体質は……ポップしか見当たらなかった。

おしまい
※レオナちゃん、アバン先生はツッコミ気質があると思いますが、二人ともボケを演じたがると思うんですよね～。